# 令和５年度　学校自己評価システムシート　（ さいたま市立大牧小学校 ）　　学校番号　０３８

【様式】

| | |
|---|---|
| 目指す学校像 | 笑顔のあふれる学校（あいさつ・返事、学習、清掃）づくりをめざし、学校教育目標「生き生きした　活力のある子」の育成を実現する。 |

| | |
|---|---|
| 重点目標 | 1　さいたま市「アクティブ・ラーニング」型授業の充実<br>2　コミュニティ・スクールの推進<br>3　さいたまＳＴＥＡＭＳ教育の推進<br>4　さいたまＳＤＧｓ教育の実践 |

※重点目標は４つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

| 達成度 | | | |
|---|---|---|---|
| | A | ほぼ達成 | （８割以上） |
| | B | 概ね達成 | （６割以上） |
| | C | 変化の兆し | （４割以上） |
| | D | 不十分 | （４割未満） |

## 学校自己評価

| 年度目標 | | | | | 年度評価 | | | 学校運営協議会による評価 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | 実施日　令和６年１月３１日 |
| 番号 | 現状と課題 | 評価項目 | 具体的方策 | 方策の評価指標 | 評価項目の達成状況 | 達成度 | 次年度への課題と改善策 | 学校運営協議会からの意見・要望・評価等 |
| 1 | (現状)<br>全国学力･学習状況調査において、国語、算数、理科のいずれも、平均正答率は全国との比較で大きく上回り、無回答率も低く抑えることができたことから、児童の基礎学力の定着、教員の指導力向上を図ることができた。<br>(課題)<br>課題の設定や解決について、自ら見出し、自己決定しようとする意欲を伸ばしていく必要がある。また自分自身の思いや考えを文章に書き表すことに消極的な側面があり、話すことや書くことによって、豊かに伝え合う力を伸ばしていく必要がある。 | ・自律的な学びの充実 | ①さいたま市｢ｱｸﾃｨﾌﾞ･ﾗｰﾆﾝｸﾞ｣型授業による６つの学習ﾌﾟﾛｾｽに基づいた学習場面を展開し、児童の自発的な気づきや追究･探究を促す。<br>②学校課題研究を充実させ、全教員が互いに公開する授業(ｱｸﾃｨﾌﾞ･ﾗｰﾆﾝｸﾞ型授業を含む)の実践に取り組み、伝え合いを中心とした表現力を育む。 | ①学習ﾌﾟﾛｾｽに基づいた授業ｱﾝｹｰﾄを、各学期末、全校児童に実施し、肯定的回答８割以上を得る。<br>②学校評価に｢自律的な学び｣に関する項目を設け、保護者評価の肯定的回答 8 割以上を得る。 | ①全教員が、｢ｱｸﾃｨﾌﾞ･ﾗｰﾆﾝｸﾞ｣型授業を実施した。児童に学習ﾌﾟﾛｾｽに基づいた授業ｱﾝｹｰﾄを実施し肯定的回答は 96.5%であった。<br>②全教員が、表現力を育むことに重点を置いた公開授業を行った。「子どもたちが自ら課題をもち、自ら学習を進め、友だちと学び合いながら行う授業が実施されている。」の学校評価保護者の肯定的回答が 85%であった。 | A | 引き続き、自律的に学ぶ力の育成を図っていく。そのために、個に応じた指導の充実が必要である。個別の学習プランの作成やデジタルツールの活用を進めていくと共に、児童同士が対話や協働を通して、深い学びにつながるように授業を実践していく。 | ・ｱﾝｹｰﾄの肯定的評価が評価指数を超えており、達成度はＡでよいのではないか。<br>・学校公開日の授業では、先生は前時の授業を意識し、子どもの意見を生かしながら進めていた。ｱｸﾃｨﾌﾞﾗｰﾆﾝｸﾞが定着していると感じた。<br>・デジタルツールを使える教員は増えている。児童が一人 1 台タブレットを使い、教員が全体をマネジメントする方向での活用を期待したい。 |
| | | ・個別最適な学習とより一層の学力向上 | ①高学年において 9 教科の教科担任制指導を実施し、学力向上を図る。<br>②ICT の利活用を一層充実させ、「書く活動」の機会･場面を充足していくことで語彙力を伸ばし、豊かに表現する力の育成に努める。 | ①全国学習調査、市学習調査において、R4 年度の自校の正答率を上回る。<br>②児童のﾀﾌﾞﾚｯﾄ持ち帰りを推進し、家庭での学習利活用を促進する。<br>③｢書くこと｣に関する学習ｱﾝｹｰﾄを全児童に行い、肯定的回答 8 割以上を得る | ①全国学習調査(4 月)では、R4 年度の自校の正答率から 5 ポイント向上した。<br>②長期休業期間にﾀﾌﾞﾚｯﾄ持ち帰りを推進し、家庭での学習利用を促した。<br>③２学期末に児童にアンケートを実施し「書くこと」の肯定的回答が８１％であった。 | B | 学んだことを生かして文章に表したり考えをまとめたりする活動を行う。また、一人一台端末の活用により「書くこと」の選択肢を広げ、楽しく自発的に学ぶ姿勢を伸ばしていく。 | |
| 2 | (現状)<br>ｺﾐｭﾆﾃｨ･ｽｸｰﾙ実施 2 年目となる。昨年度は｢児童の安全な登下校｣と｢学校ﾌｧｰﾑの管理｣の 2 本をﾃｰﾏに、学校運営協議会で熟議し、その具体的方策を探ってきた。SSN を通じ、所属する各団体ができること(見守り活動、ﾌｧｰﾑの耕作)を進めてきた。<br>(課題)<br>塾議題は C･S 準備校年度から 2 年間続けて取り組んできている。今年度はより地域の｢自分事｣目線で塾議題を設定していく必要がある。また昨年度はｺﾛﾅ禍により SSN の取組みが十分図れなかったため、今年度はより積極的な協働実践に取組み、連携を深めていく。 | ・熟議による目標の設定と成果 | ①計画的に委員会を開催し、熟議の進行･説明を丁寧に行い、当事者意識をもって目標を設定できるようにする。<br>②経過報告と成果･課題について資料を整え、熟議の方向性を見失わないよう協議会の準備と整理を行う。 | ①第 1 回協議会の熟議で、目標および関係団体･機関との協働内容を決定する。<br>②第 2、3 回協議会で、関係団体･機関の取組状況を確認し合い、進捗･成果･改善点について熟議する。 | ①「地域が願う児童の姿」について熟議し、地域・家庭・児童が関りを深めるための取り組みについて、行事の実施や情報提供を行うことが熟議内容として出された。<br>②地域の祭りや行事が行われ、児童が参加する姿が見られた。児童が地域の方と顔見知りになり、関りが深まることに繋がった。 | A | 地域と学校のつながりを徐々に取り戻すことができた。「地域が願う児童の姿」の実現のために、来年度も、児童が地域の交流やイベントに参加したり、地域・保護者が学校活動に参加したりする機会を設けていく。 | ・熟議により地域、家庭、児童それぞれの関わりや在り様について、将来にわたって地域に貢献できる人間を育てたいとする一定の方向性が見られた。各委員が所属する団体・組織等で具体的な事業に結び付けられたことが意義深い。<br>・昨年からの熟議の内容が、ＳＳＮ連絡協議会で明らかにされ、それらが所属する各団体等の活動に結び付いたことで、ＣＳやＳＳＮの一体的な推進について理解が進んだ。学校だよりやコミスクだよりの果たす役割も大きかった。 |
| | | ・ｺﾐｭﾆﾃｨ･ｽｸｰﾙと SSN の一体的推進 | ①学校運営協議会の熟議内容を SSN に降ろし、SSN の構成組織団体で担える側面を協議し、役割分担を構造化して、協働の実績･成果を見出す。<br>②学校だより、学校 HP、学校運営協議会だより等を通じて積極的に情報発信し、経過や成果について共有する。 | ①SSN を年間 2 回開催し、運営協議会の協働内容を関係団体･機関ごとに割り振る。<br>②割り振った協働内容について、関係団体･機関が取組を進め、成果を見出す。 | ①運営協議会の熟議内容を受け「地域の行事」「登下校の安全」について、具体的な情報交換や活動実施の確認を行った。<br>②学校だより、コミスクだよりを通して、地域の祭りや行事予定、活動の様子を情報発信した。登下校の安全については、関係機関に働きかけ、交通表示等の改善に繋げた。 | A | 運営協議会の熟議内容を受け「地域の行事」「登下校の安全」の活動をコロナの制限なく行うことができた。現在行われていることの情報発信や地域と児童の関わりの充実に力を入れ、着実に成果を積み重ねていく。 | |
| 3 | (現状)<br>昨年度は｢STEAMS TIME｣を、3 年生以上で年間 9 時間を教育課程に位置付け、授業実践を行った。<br>ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾐﾝｸﾞ的思考を育む活動として Web ｱﾝｹｰﾄを実施し情報の収集･整理･発信すること、ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾐﾝｸﾞ教材 Mesh を活用してﾌﾟﾛｸﾞﾗﾐﾝｸﾞ体験すること等を実践してきている。<br>(課題)<br>ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾐﾝｸﾞ学習はまだ 1 年間の積み上げしかない。引き続き授業実践を積み重ね、ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾐﾝｸﾞ的思考力の育成に取り組む。<br>｢さいたま STEAMS 教育｣に関する本校の取組を家庭･地域に紹介して理解を図り、学習協力を得たり授業の充実を図ったりする。 | ・STEAMS TIME の充実 | ①｢STEAMS TIME｣ｺﾝﾃﾝﾂより、ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ実践例を積極的に取り入れ、より豊かな体験活動を実践する。<br>②ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾐﾝｸﾞ教材 MESH を一層活用して思考過程をしっかり体験させ、ゴールに辿り着いた時の充実感、達成感を味わわせる。 | ①低学年を除く全学年で実践例から一事例以上実践し、成果と課題を検証する。<br>②ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾐﾝｸﾞ的思考に関する振り返りアンケートを実施し、肯定的回答 8 割以上を得る。 | ①Microsoft Forms を使ったアンケートの実施や、MESH をプ活用したログラミング活動をしたり PowerPoint を活用した発表を行ったりして、プログラミング的思考の育成を図った。<br>②児童にアンケートを実施し、肯定的回答は 92.2%であった。 | B | MESH、Microsoft Forms、PowerPoint を取り入れ、昨年度より STEAMS 教育を実践する際の環境が整備された。児童自らが新しい価値や課題を生み出す力を今後も育成していく。また、教員に対する STEAMS 教育に関する研修プログラムを充実させていく。 | ・「教員が今までの経験にないことを児童に教える」ことは大変なことだが、教師の仕事として「自ら学んで教える」ということを期待したい。<br>・STEAMS TIME については、イメージをもって授業を参観したいので、引き続き、ＨＰやブログで伝えてほしい。<br>・学校公開で参観した STEAMS TIME は、見沼のクイズ（鳥、草花）で、タブレットを使って楽しそうだった。自らのを子ども時代を振り返って「授業ってこんなに楽しいものになっているんだ」と感じた。 |
| | | ・さいたま STEAMS 教育の周知と理解･協力 | ①授業参観日、学校公開日に時間割を設定し、保護者、地域の方に公開する。<br>②学校ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞにｺｰﾅｰを設け、実践状況を掲載し理解を図る。<br>③学校だより、学年だよりを通じ、学習協力を依頼したり、学習成果のお礼を掲載したりし、周知と理解を図る。 | ①2～3 学期にかけ、STEAMS TIME の授業公開を、3 年生以上の全学級で 1 時間以上行う。<br>②学校評価に項目を設け、STEAMS TIME の活動や公表について、保護者、地域から肯定的回答 8 割以上を得る。 | ①１月２７日の学校公開で、STEAMS TIME の授業公開を、3 年生以上の全学級で行った。<br>②学校公開での保護者対象アンケートの周知が行き届かず、少人数のみのアンケート実施になった。アンケートでは肯定的回答は８６％であった。 | B | 大牧小ブログ、学校だより、学校公開を通して、本校の「さいたま市 STEAMS 教育」の周知や理解を図った。次年度も、学校内での STEAMS プログラムの事例を積極的に発信・共有し、認知度、理解度を高めていく。 | |
| 4 | (現状)<br>全校としては、児童会を中心にした各学年の発達段階に応じた取組を行ってきた。ﾍﾟｯﾄﾎﾞﾄﾙｷｬｯﾌﾟ回収、給食の完食呼び掛け、ゴミを出さない活動の実践など。6 年生は独自に｢よりよい未来をつくるために｣をﾃｰﾏとし探究的、教科横断的な学びに取り組んだ。<br>(課題)<br>1～6 学年の全校児童が共通して取り組むﾃｰﾏを設け、取組み成果を可視化し、児童自身や保護者、地域、来校者に伝わる実践とする。<br>「さいたま SDGｓ教育｣に関する本校の取組を家庭･地域に紹介して理解を図り、学習協力を得たり授業の充実を図ったりする。 | ・さいたま SDGs 教育の充実 | ①児童会発信による全校重点目標を掲げ、全児童が共通して取り組む活動を主体的に考え、実践する。<br>②SDGｓとしての取組が、他教科と横断的な学びになるよう取り上げて扱う。 | ①1 学期中に重点目標を決め、学年ﾚﾍﾞﾙまたは学級ﾚﾍﾞﾙで活動内容を決め、取組みを開始する。<br>②毎学期末に児童ｱﾝｹｰﾄ調査を行い、自分の取組みについて肯定的回答 8 割以上を得る。 | ①児童会の発信で「大牧小 SDGs プロジェクト」を実施した。「児童会からクラスでの実践を呼びかけ」⇒「クラスから個人の実践へ」という段階を設定し、自分事として考え、取り組もうとする活動を行った。<br>②児童にアンケートを実施し、肯定的回答は 93%であった。 | B | SDGs は専門的な内容が含まれているため、児童に対してはシンプルで理解しやすい言葉で説明することが大切であった。児童会の取組は、低学年から高学年まで伝わる活動となった。今後も、自律的な学びにもつながる児童発信の取組を継続していく。 | ・SDGs は人により捉え方がいろいろある。先生方は学びながら子どもに教える時代と言われるが、その成果・結果を子どもが、地域に向けて SDGs を発信する場があるとよい。<br>・SDGs に対する保護者の評価が低いのは、情報を受け取る保護者側の意識の問題だと思われる。保護者が理解できるような情報発信をお願いしたい。学校評価の保護者アンケートの回答率も低かった。家庭への発信の仕方を工夫することが大切だと感じる。 |
| | | ・さいたま SDGs 教育の周知と理解･協力 | ①取組みの進捗状況や成果について、児童会が軸となり、工夫ある展示方法や発信の仕方を考える。<br>②進捗や成果の展示、発信により、保護者、地域の声を集め、取組みに生かす。 | ①展示方法、発信方法を 1 学期中に決め、9 月から展示、発信に取り組む。<br>②学校評価に項目を設け、展示や発信について、児童、保護者･地域、教職員それぞれから肯定的回答 8 割以上を得る。 | ①外部講師を活用した。「SDGs１７の目標」から、自ら課題を選び、アクションプランを立て実行し、パネルやタブレットを使って取り組みを発信した。また、地域施設に、取組をまとめた掲示をした。<br>②学校評価のＳＤＧｓに関するアンケートを実施し、肯定的回答は児童が 93%、保護者が 71%、教職員が 88%であった。 | B | 外部講師を活用し、クラスやグループで SDGs についてのディスカッションを行うことで、異なる視点やアイデアを共有し、SDGs に対する理解を深めることができていた。児童が SDGs に対して興味を持ち、実践的な経験を通じて学ぶことができるように、カリキュラムを構築していく。 | |